

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)～23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「中東メディア論」

保坂 修司 (日本エネルギー経済研究所)

楔形文字に粘土板、ヒエログリフにパピルス、アルファベットにパーチメント、これらはいずれも中東で誕生したメディアであり、その意味で中東は歴史的にみると、メディアや情報通信技術の最先進国であった。しかし、15 世紀なかばにヨーロッパで活版印刷が開発されると、オスマン帝国でイスラーム関連のアラビア語活版印刷が禁止されたこともあり、これ以後、中東地域はメディアの分野でヨーロッパから大きく立ち遅れることになる。

こうした状況は現代になっても、それほど変わらない。西洋植民地主義のくびきから脱したあとも、中東諸国の大半は非民主的な体制によって支配されつづけ、そのメディアは、技術的にも制度的にも、欧米のそれとは似て非なるものへと発展していったのである。

さらに、メディアに関する科学技術や製造業も十分に発展しなかったため、中東諸国は、欧米で開発された情報通信技術やアジアで製造された機器に依存せざるをえなかった。したがって、中東のメディアは制度・技術両面で自由の欠如を蒙ることになる。後者に関してはコンピューター時代に入ってから、アラビア語を利用できるオペレーション・システムがなかなか設計されなかったほか、アラブ世界全体を統一するアラビア文字コードが作られないなど、中東諸国はネガティブな影響を受けつづけた。

非民主的な体制下では、報道の自由も個人の知る権利もほとんど考慮されず、徹底した情報統制と検閲によってメディアは体制の伝えたいことを国民に伝えるための道具とされた。一方で、体制側は、敵対する国や国内反体制勢力のメディアに対する妨害も積極的に実施、多くのジャーナリストたちがきびしい迫害を受けることになる。

他方、1980 年代後半から衛星放送が普及しはじめると、体制が管理できない情報が国外から流入するようになり、1990 年代なかばごろから中東でもインターネットが導入されるようになると、さらにその傾向に拍車がかかった。また、21 世紀に入ってから、Twitter や Facebook などソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)が普及しはじめ、これらは、非民主的な権威主義体制下において、反体制派や一般民衆がもちうる強力なメディアとして機能するようになり、体制にとって大きな脅威となった。

2010 年末からのいわゆる「アラブの春」においては、西側メディアを中心に、体制の打倒に SNS が決定的な役割を果たしたとの言説が有力となり、「Facebook 革命」とか「革命 2.0」といったキャッチーなフレーズが躍るようになる。この説が適切かどうかについては議論があるが、少なくともジャジーラを筆頭とする衛星放送、そしてカメラ付き携帯電話・スマートフォンを含めた広義のメディアが、政体を揺るがす大きな影響力をもちはじめたことはまちがいない、その技術・制度・コンテンツ等、多面的な研究が求められている。